

崇武館  
館長 飛鳥宗一郎  
(宗雄)

## 先人の言葉から学ぶ（その6）

### 武の道は 和の道究め 和を求む道

#### 出典・・・大塚博紀の道歌（その3）

#### 4 大塚博紀の道歌

##### (1) 和の道究め和を求む道

『武の道は ただあら事と な思ひそ 和の道究め 和を求む道』

先ずこの歌の意味から説明したい。

私は漢和辞典を二種類使っている。一つは、かの有名な大修館書店発刊の「大漢和辞典」（諸橋轍次著。昭和33年初版、全12巻、別冊索引1巻）で、詳細に調べたいときや次の二種目と比較したいときに開く。次いで、学習研究社版の「漢和大辞典」（藤堂明保編。昭和53年初版、全1巻）である。

ところが、この二種の漢和辞典で「武」の解字解釈が違っていたのである。

まず「大漢和辞典」の方は、『戈（か）と止（とどむ）との合字。干戈（かんか）の力により兵乱を未然に防ぐ義であり、故に、戈と止の二字を合す』とある。

次に「漢和大辞典」では、『戈（か）と止（足の形を描いた象形文字から生まれた）の会意文字で、戈（ほこ）をもって足（止）を踏み鳴らして突き進む。堂々と前進するさま。ないものを求めてがむしゃらに進む意を含む』とある。加えて、『春秋左氏伝に戈と止むるを武となす、とあるのは誤り』と付記しているため、それまで定着していた「大漢和辞典」の解釈を明らかに否定している。藤堂の説から汲み取れるのは、戦に際して堂々と立ち向かう積極性を意味している。

なお「干戈」の「干」は楯で、「戈」は先が横に突き出た諸刃の「鳶口（とびぐち。棒の先端に鳶の嘴の状に金具を付けた道具）」のような武器である。

ここに出てくる「春秋左氏伝」とは、孔子（BC551～479年）の編纂と伝えられる歴

史書「春秋」の代表的な注釈書で、紀元前700年頃から約250年間にわたる歴史が記されている。中国の春秋時代（BC770～403年）といえば、儒教の徳化徳政が特段に布かれていた時代で、宣公12年（魯の第21代君主、在位はBC608～591年）の項に記載されている『戈と止むるを武となす』の解釈は当然の帰着だったかもしれない。

また、大塚先生は著書「空手道」（第一巻）《師範語録》の3頁に次のように書かれているから、藤堂明保（1915～85年）が誤りと指摘している「春秋左氏伝」の同じ所からの引用である。

このように、今回は「空手道」〔（第一巻）《師範語録》の何箇所かから引用するのは、この著書は絶版となっており、第二代宗家が保存されていた最後の残冊3部を私がお譲りいただいてから15年ばかり過ぎており、中古本の出品もなく入手困難な貴重本であるため、内容の一部分であるが読者諸氏に知らせたい気持ちからである。

武は本来平和を象徴するといわれている。「武」の解字は「戈」と「止」で、「戈」は武器であり「いくさ」「たたかい」の意がある。「楚子曰、止戈為武」とある。「いくさ」を「とどめ」即ち世の中から争いをなくして平和を招来し人間の生活を幸福にするのが「武」の本義であり、それが武の道であった。

全ての国家社会は時代の進歩変遷にともなっておのおの持つところの主義主張を異にする。武もまたその持つところの主義主張が時代の進歩変遷にともなってこれに順応するように方向づけられたことは、理の当然である。功名手柄だけによって立身出世の道が開かれていた戦国時代における武は、ただ戦場で敵に勝つことにのみ目的がおかれて、技術の上達、胆力の錬磨、体力の増強が主眼であった。その後戦乱が治まり平和な封建時代にはいと治国が要望され君主に対する忠誠、犠牲的奉仕、忍従などが強要され、これらを美德とする精神面へと武の在り方がおきかえられたのである。

なお、藤堂の「漢和大辞典」出版以後は、『戈をもって足で堂々と前進するさま』の解釈が多く採用されようになっている。

次いで『ただあら事と な思ひそ』のところであるが、「あら事」は「荒事」であり、広辞苑では「一般に荒っぽい仕事をする人」の意味と、「歌舞伎劇で、怪力勇猛の武人とか、超人的な鬼神などを主役とする武張った狂言。またその荒々しく誇張した演出様式」である。

「荒」の字は、「あれる」「あらい」「あらす」「すさむ」の意である。「亡」は「ない」や「何も見えない」であるから、草冠を取れば「なにも見えないむなしい川」となり「実りの作物がなにもなくむなしい」意味となる。また、漢字本来の意味と異なる我が国特有の使用法から「あらい」（乱暴なさま、あらあらしい）、「あれる」（あばれさわぐ）、「あれる」（肌がガサガサになる）がある。

この道歌には、武技をもって人前で強さ見せびらかしたり、事に及んで乱暴な振舞いに及んだり、試合や稽古において相手の立場や気持ちを無視して自分の勝ちや優勢だけを望む行為など、武道を修業する者の心得違いの全部を戒めている。

「な思ひそ」の「な」は副詞で、「な・・・そ」のように動詞を間に挟んで、その動詞の表わす動作を禁止する語。したがって、「そ」と「な」が呼応して指示の強調を表わすので『決して思ってはならない』となるのだろう。「思ひ」は「思い」の旧仮名づかいである。

『和の道究め 和を求む道』のところは、同じく「空手道」第一巻の10頁「武技は和の術」から引用する。

武道は和の道であり武技は和の技である。和の表現された形が武技である。和の表現である武技を鍛錬することによって和の道である武道の理念に徹し、和を貫徹する精神を修養することができるのである。武技は和の表現で決して無理がない。理論的であり科学的でもある。

この文章の後に『天の道に背かず地の理に逆らわず人の道に悖らず・・・』と続くが、この言葉の意味については来月別項を起こして述べることにしたい。

前記引用よりも遡るが、6頁の「武道精神とは何か」から次を読んでいただきたい。

武の根本義である平和は口にはいい易いがこれを現実に人間社会にもたらすことは容易な業ではない。過去の歴史をひもとくまでもなく現在の国際情勢をみると時、あるいは不可能事ではないかとさえ思われるのである。然し、それが如何に困難であろうもこの平和を人類社会に招来しない限りわれわれ人間の生活は決して幸福にはなりえない。如何に困難であろうが、よし不可能事であろうが、是が非でも平和を勝ちとらねばならないのである。そしてこれを招来するものは神の力でもなければ仏の利益でもない。それはわれわれ人間の力によってなしうるのである。社会機構の単純だった時代でさえ困難であった平和促進は複雑極まりない然も空前な科学の進歩をみた現在の国際情勢下にある人類社会においては尚更容易なことではない。この不可能に近い武道理念を実現するためにはわれわれ人間に異常な精神力を必要とするのである。この異常な精神力こそ武道精神なのである。武道精神は人類社会に平和と幸福をもたらすための強力な原動力となるのである。この目的達成のため如何なる難事といえどもこれに屈せずその難関を乗り越え目的の貫徹を断行しなければ止まない厳しい精神が武道精神である。

このように、二箇所からの引用文を読んで察することできると思うが、この道歌には二つの違う意味が包含されている。

一つには、『武技は和の道である』に注目したい。それは、「和」には「やわらぎなごむ」、「かどたたず、まるくおさまる」、「ゆったりとしてやわらいださま」などである。武技は無理やり行動しない自然の動きと理法に適う身体の運用が肝要であり、それを可能とする心身の情態を整える意識が望むべき姿である。自然の理法にしたがって動きたいように動き、相手の攻勢に逆らわず体の用をもって行動する。「和の道」は体力や力任せ、或いは相手を威嚇し恫喝するような不心得は介在の余地なしとする絶対境地の示し、来月述べる「天地人之理道に和す」を基とする技法行使の理念である。

二つには、「和」は「なごやか」とか「なごむ」であり、論語・学而編に『礼の用は和を貴しと為す』とあり、聖徳太子の「十七条の憲法」第一条に『和を以て貴しと為す』とあるのも同じ考えから出たもので、「用」は「以て」に通じる。この場合「礼」とは、古くは六芸（礼、楽、射、御、書、数）という教養の筆頭であり、五常（仁、義、礼、智、信）という精神の中の柱として人が守るべきかどめ正しい行いを言っている。大塚先生の武道精神の中核をなすのは、社会や国家の平和推進と個々人の心の和ということできる。一家団欒が脅かされ、正しく生きようとしても生命の危機にさらされるなら、平和や安らぎ幸福とは全く掛け離れた状況となってしまう。和道流の「和」は、先生のこの思想と精神をもって「武」と合体し成立していると承知しなければならない。和道空手は、唯一人沖縄県出身者でない大塚先生が興した流派であり、大和の武であることに相違ない。

大塚博紀という一武道家の道歌に、世界平和を強く望む心が読み取れるとするならば、それを標榜した人の心の中には、どのような苦悩と安らぎへの強い願望があったのか計り知れない思がする。敢えて言うならば、清の康熙帝（在位 1661～1722 年）を出典とし西郷隆盛（1822～77 年、維新三傑の一人）が揮毫に際し好んで書いた『敬天愛人』（天を敬い人を愛する）や、柔道の創始者・嘉納治五郎の言葉『精力善用 自他共栄』（柔道理念の一つ）と同じ響きで受け止めるのは私ばかりでないと思う。

もう一度、(株)創造から出版された「空手道」（保存版）の中で、大塚先生の談話「明正塾前後」から先月と同文を再掲するので、先生の心情の一端を理解してもらいたい。

私の長い武道生活の中で、悲しい思い出といえば、なんといっても学徒動員で太平洋戦争に出向いていった若者達のことです。その頃、私は東大、明大、立教大、農大、日歯大などの師範をしておりましてから、学業を捨てて続々と戦地に赴いたまま再び帰らぬ若者を沢山知っております。惜命の情とでもいうのでしょうか、有能な若者ほど数多く死んでいったような気がいたします。戦後になってから、武道で心身を鍛えた若者は、崖頭に立っても冷静であったと聞かされております。もちろん死に直面しながら完璧に冷静であり得たとは思いませんが、すくなくとも動揺を抑えていくだけの沈着な心を持っていたであろうことは固く信じていることができます。あの頃の若者は心が透明で実に真摯なんです。あんな素晴らしい若者はもう見当たりませんね。

ここまで述べてきて、もうこれ以上言葉を重ねる必要はあるまい。『武道の本質は、一時の場面を念頭において技を磨くものではない。邪念を捨て清浄な心根をもって心身を究極まで磨いて人間修業に励むのが目的であって、その結果生まれる技は天地人の理道に一致し、心は常に和やか安らかにして、世界人類の平和を願う絶対境地に至る』となるのだろうか。

私が今まで目にした空手道指導書や関係書物の中で、武道精神をここまで高邁に記した人はいなかった。平和主義などと言うに容易く、人心を平和思想で充満させるよう導くのは難しい道程といえる。先生の著書から騰騰（自らを天のまごころに預け任

すさま)たる流れを感じないでいられない。勿論、技法解説の内容も比類ないもので、言葉の一つ一つが素晴らしい。折をみて照会したいと思う。

## (2) 業に極致はなきものと知れ

『武の業は 宇宙の如く 無限にて 業に極致は なきものと知れ』

以前に書いたことあるが、空手道が本土に紹介(1922年)される以前から沖縄県で言い伝えられた「空手三無」があった。

- ① 空手に先手なし
- ② 空手に構えなし
- ③ 空手に奥義なし(又は、「空手に極意なし」とする説もあり)

がそれである。いつの頃から誰が言い出したか記録にはないが、武士松村といわれた松村宗昆(1809~99年)以降でないかと思っている。

この中の③の「奥義」(最も肝心なところ、極意と同義)は、ここでの「極致」(最後に辿りつく最も素晴らしい境地、極めつけ)と近い意味合いを感じるが、この両者ともに『行き着く先はないと思え』なのである。

そもそも学問をはじめ、武道、芸道、技芸などの手技足技の場合も、これで最後の極致であるという到達点はないと教えられてきたはずである。

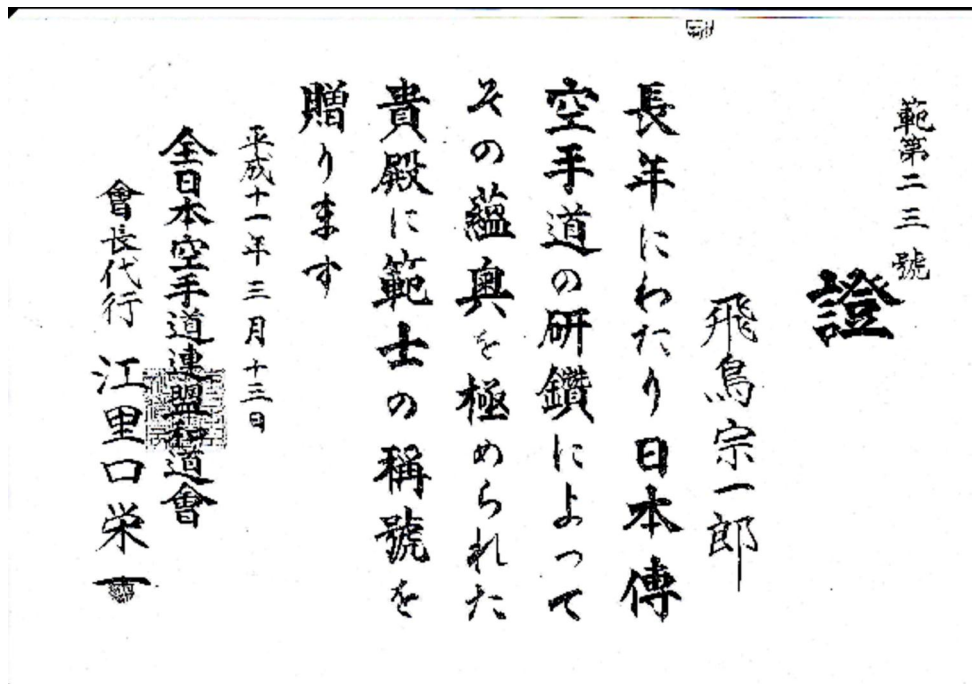
各道各芸の先達たちは心血を注いで励み、その努力する姿には限りある時間(命)とのたたかい、体力との格闘、思案思考限界への挑戦、覚悟覚道への苦悩、思うに任せない現世(忍土)との煩悶苦衷など、察するに余りあるものが沢山あると思う。歴史を遡れば後世から天才と呼ばれた人も少なからず存在した。しかし、これらの人たちは、才能のおもむくままに業績を残したのでないことも明白である。人間業は所詮は人間業であって、極致に達したと他者から評価されたとしても、当人はその先が見えなくて悩み苦しみ悶えていたのでないかと想像できる。とすれば極致とか究極の到達点はないものと心得て、ひたすら修業に励まなければならない。

現代の武道界では、熟達した指導者に対し「錬士」「教士」「範士」の称号を授与している。称号の始まりは、明治28年(1895年)「大日本武徳会」(昭和20年、太平洋戦争終結により解散)が設立され、設立初年の「第1回武徳祭」において優れた演武をした者に「精錬証」を発行したのに始まり、その後「錬士」「達士」など名称の変遷もあった。戦後、「武道禁止令」が段階的に解除された後、称号は復活し今に引き継がれている。

私は、和道会から平成11年3月に範士の称号を授与されている。公益財団法人全日本空手道連盟の「称号證」は一様に『空手道・・・を允許する』であるが、和道会の場合は号位によって文面が違いなかなか蘊蓄あるものとなっている。この文面は、大塚先生が亡くなられた後の昭和58年3月の中央技術本部会議において決定されたもので、六段から八段の高段位実技審査の実施決定も同じ時期であって、私は中央技術本

部員として審議の場に同席していた。ということは、和道会称号の授与は、大塚先生存命中はなかったのである。

私の「範士證」は次である。



この文中で「蘊奥（うんのう）」がどうも気になる。これは「学問や武芸の奥深いこと」を意味し、やはり「奥義」や「極意」に通じる言葉一つといえるが、「蘊奥」もやはり「極致」とは違う。

何故、「奥義」とか「蘊奥」とか、そして「極致」などと比較しながら述べてきたかという、武技の修業には相手に対する恐れや怒り侮り、自己に対する迷い疑い、慢心と過信、不慈悲、驕慢、無礼などなきよう諫めとしながら、生涯を通じて飽くなき求道の精神が最も大事との導きであって、「奥義」に出会うのも「蘊奥」を極めるのもその一過程に過ぎないのである。

因みに和道会「教士」の文面は次の通りである。

貴殿は長年にわたる空手道の修業によって所作精妙の域に達し技能衆人に教範たるものと認める 依つて茲に教師の稱號を授与する（縦書）

ともあれ、文章負けしないように励まなければならないが、現実はそのに応える稽古ができていないのか、私自身内省している。

称号文章を取り上げながら極致に触れてきたが、将棋棋士九段の免状は次であり、何らか関連を感じるがこれも凄い文面である。

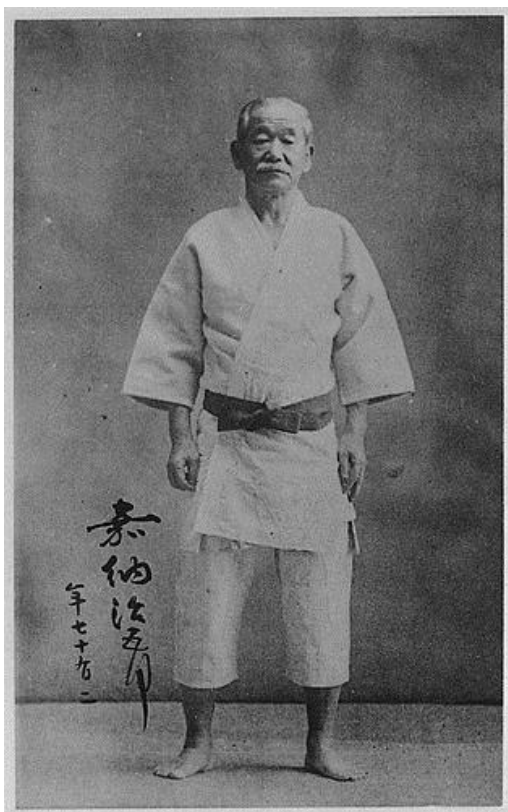
夙ニ将棋二天賦ノ資有蘊奥ヲ極メ明哲ノ師宗ナルニ依而茲に九段ニ推ス（縦書）

繰り返しになるが、本来的に武道や芸道・芸術など、人間の精神や身体活動で至高の境地を目指す分野においては、タイムレースや得点競争のように新記録を達成したなどと違い、『これでいい』とか『絶対境地に達した』はないのである。むしろこの分



野では、「無心」とか「無私」の境地こそ尊ばれることかもしれない。

下の写真は、左が柔道の創始者・嘉納治五郎（1860～1938年）で、右が不滅の69連勝で知られる第35代横綱・双葉山定次（1912～68年）の写真である。この写真から悠揚迫らない自然体を感じるのは、作為的でない無我無心の心の有り様が滲み出ているからでなかろうか。生涯お手本にしたい二人の姿である。



次いで、「武の業」のところの「業」である。武道でこの言葉を使うと、「業」と「技」は同義かと勘違いしてしまいそうだが明らかに相違する。

「技」は手先が器用で巧みなさまをいい、技量や技能、技芸とか技巧、そして技術と技法というふうに使われる。他には国技、特技、格技、競技、演技などである。手足を使って行う細工や職人の腕前にも多く用いられる。

一方で「業」は、「ギョウ」なら業績、職業、卒業、副業など。ゴウと読めば業火、因業、罪業、悪業、業腹、非業である。ワザならば仕業、荒業、業物となり、特殊な読み方では生業（なりわい。生活をたてるための仕事）がある。何れを取り上げてみても、行動とその結果につながる場合の言葉を構成している。

この中の「ワザ」であれば、「こと」「仕事」「事業」などの総称を指し、この道歌では技術も心構えも人間性の育成も併せた「武の道」全体を指し、精神と技術と身体の三位一体のことである。加えて、武道の過去と現在を見据え、未来をも見通した洞察

力が欠かせないという観点が含まれていることを見逃してならない。「業」は「本務とする仕事や学問」から発して「生涯修業」へと連繋する。

『宇宙の如く 無限にて 業に極致は なきものと知れ』のところはさして解説も必要としないようだが、思うところを少し触れておきたい。

太平洋戦争が日本の敗戦により終結したのは、昭和20年(1945年)8月15日、私は小学校4年生の9歳であった。終戦を告げる玉音放送(1945.8.15 正午。昭和天皇の終戦詔勅)を聴いた記憶は今も蘇る。子供心にアメリカ軍が来れば命はないのだと本気で思っていた。ところがジープでやってきたアメリカ兵にチョコレートやガムほしさに子供達が群がったのである。私は絶対に行くまいと心に誓っていた。

終戦前後のことは、東日本大震災の直後昨年3月のワンポイントレッスンに詳しく書いているのでもう一度ご覧いただきたい。

終戦後は、戦時中よりも厳しい食料危機を筆頭に、全て物資不足の時代に入る。教育制度は戦後1年を経ずして教育課程の改変に着手され、漸進的に改革(学制改革)が進められていく。私が中学校に学ぶ頃の宇宙観は、宇宙の広さは17~20億光年といわれ、それはすごいと思った。ところが今や宇宙の大きさは470億光年と推定され、地球から見える一番遠いところは137億光年だというのが、470億光年の外側は何だろうなどと考ただけで頭が痛くなる。また、今年7月4日欧州原子核機構から、1964年に英国の理論物理学者のピーター・ビックス博士が存在を予言した全ての物質に重力を与える素粒子が発見され、「ビックス粒子」と名付けられたと発表された。発見まで、予言から50年近い歳月を要した。科学の世界も日進月歩の発展は素晴らしい。

大塚先生は『武の業は宇宙の如く無現』というから、描く構想の偉大さと強固なる信念を感じないでいられない。そして、武の所業には極致という行きつく先はないと説く。正に宇宙そのものの膨大無辺なることを思い浮かべれば常人の及び難い観念といえる。あくなき追求(求道心)を怠らず進み、慢心や一人勝手を諫める教を肝に銘じておきたい。

『何事も 打ち忘れて ひとすらいに 武の島さして 漕ぐぞたのしき』は糸東流開祖の摩文仁賢和(1889~1932年)の残した道歌である。

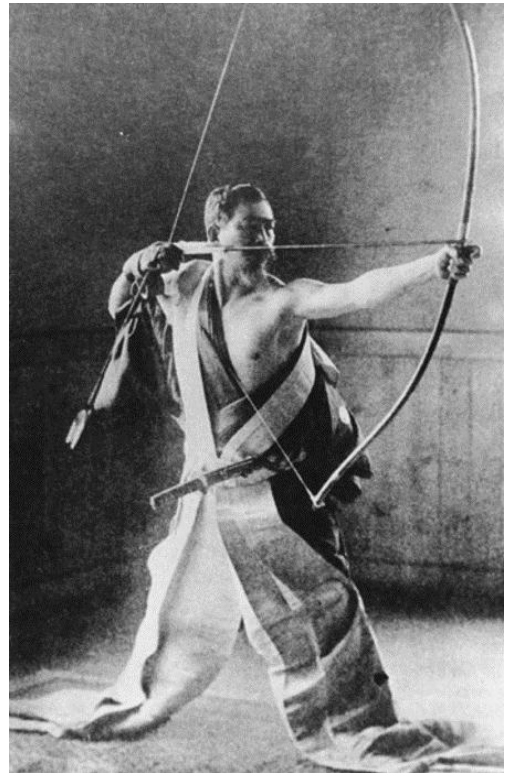
月刊「空手道」8月号の特集「真実の初代大塚博紀」(後編)に大塚先生の道歌が掲載されている。

『ひとすらいに 歩みつづけん 武の道を 限りある身の 果つる際まで』、

この道歌は、著書「空手道」には収録されていない。理由を考えるなら、摩文仁賢和の道歌と同様に自らの心境を吐露して詠んだものであって、和道空手の本質を語るの歌とは異質と考えたからに違いない。この中からも無我とか無私の心が伝わってくる感がある。



無我、無私で思い出すのはドイツ人哲学者で、1924年から6年間東北大学で教鞭をとったオイゲン・ヘリゲル（1884～1955年）は、在日中に弓道を範士八段で弓聖と称えられた阿波研造（1880～1937年、石巻市生れ）について修業し、弓道五段を允許された。阿波は、的がほとんど見えない暗闇の中で甲矢（はや、二本持つ矢の初めに射る矢）を放ち的中させた後、次いで射た乙矢（おとや、甲矢に次いで二番目に射る矢。甲矢と乙矢で矢羽の捻じれが反対になる）が甲矢の矢筈（矢の端、弓弦を掛けるところ）を射抜くことできたという逸話がある。ヘリゲルは帰国後、この時の経験を「弓道と禅」と題して講演し、それを基に「弓道における禅」を著し第二次世界大戦前のヨーロッパで大きな反響を呼び、直ぐさま英語訳も出版された。その日本語訳が「無我と無私…禅の考え方に学ぶ」



阿波研造の射姿

（訳者・藤原美子）と題して2006年に出刊されている。武道家なら一読の価値ありと思う。また、阿波研造の言葉に次がある。

- 1 的と私が一体になるには、矢は有と非有の不動の中心にある。
- 2 射は術ではない。的中は我が心を射抜き、仏陀に到る。

（つづく）